

◎ 「香りの器—高砂コレクション」

三重県立美術館 学芸員 高曾 由子

香料を用いて香りをつくり、これを楽しむ文化は、紀元前の時代に始まり、文明とともに発展してきた。香りは目に見えるものではなく、形を残すものではない。しかし、古くから香りは感情や記憶と深く結びつくものとして、人々の暮らしに欠かせない働きをしてきた。人々は遠方より香りの材料となる香料を求め、貴重な香料をおさめるために、贅を尽くした器を用意した。

今年創業 100 年を迎える高砂香料工業株式会社は、戦後より社の文化活動として香り文化の支援と普及を行い、香りにまつわる工芸品と資料の収集を続けてこられた。本展は、そのコレクションより、紀元前オリエントの香油壺から、日本の伝統的な香道で使われた漆芸品の数々、ヨーロッパ王侯貴族が愛した陶磁器や 20 世紀の香水瓶まで、242 点を選びすぐってご紹介するものである。

古今東西の「香りの器」が一同に会するこの展覧会から、ここでは各地の香りの文化を示す作品を 5 点選んでご紹介したい。

1. 《両手付香油壺》前 6～4 世紀 高 6.8cm

本作は紀元前 6～4 世紀ごろ、東地中海沿岸域で生産されたと考えられる香油壺。一見陶器のように見えるが、実はガラス製である。吹きガラスが発明される以前に一般的なガラス製法であった「コア技法」という技法を用いて作られている。「芯」を意味する「コア」の名の通り、金属製の棒を芯とし、耐火粘土でつくった中型に溶かしてひも状にしたガラスを巻き付けて成型した。ガラス冷却後、内部の耐火粘土と棒を取り除いて完成となる。現在の吹きガラス技法に比べ、たいへんに手間がかかる技術であり、本作のように細かなジグザグ模様であれば、なおさらのことであっただろう。



香油（こうゆ）とは、香りをうつした油のことで、アルコールベースの香水が発明される以前、香りを楽しむために用いられた。ギリシアにおいては、よい香りには頭痛などを癒す効果が期待され、交易によってもたらされる香料はたいへん珍重されたという。約 7cm の小さな壺であるが、手の込んだ装飾に、古代の人々の香油への思い入れがみてとれる。

2. マイセン 《色絵香水瓶「アルルカン」》19 世紀 高 7.4cm

本作は、19 世紀にドイツのマイセン窯で製造された香水瓶。アルルカン（道化師）の、頭の前に手をかざしておどけたポーズ、意気揚揚とはほえむ様子がなんとも愛らしい。アルルカンがもたれかかる柱は容器となっており、先端の蓋を外して香水をおさめることができる。人形部分はまったくの飾りであるが、手先の細かな造形や、体をひねった動きのあるポーズには、原型製作者の巧みな手腕を、繊細な表情には、高い絵付け技術を



みてとれよう。実用品というよりは、鑑賞し愛玩する性格のものであったと考えられる。

アルコールベースの香水は、14 世紀に生まれたといわれる。ヨーロッパには古くから入浴が病気を感染させるという考えがあり、体臭を隠すものとして香水は貴族の生活に欠かせないものであった。

3. ルネ・ラリック 《香水瓶「レフルール(コティ社)」》1912 年 高 10.9cm



近代フランスを代表するデザイナーの一人、ルネ・ラリック(1860～1945)による香水瓶。蓋は向かい合う2匹の蟬をかたどり、瓶側面にはスイカズラの花から立ち上がる女性を描く。透明ですっきりとした形の瓶に、型押しや着色によって図柄がぼんやりと浮かびあがり、その幻想的な趣を一層強めている。

19世紀末にジュエリー制作の分野で名を成したラリックは、40代になるとガラスという素材に可能性を感じ、転向を試みた。1点制作の高価なジュエリーとは異なり、ガラス工芸は量産品の制作を受注しなくては採算をとることができない。受注を求めていたラリックを支えたのが、香水瓶制作の依頼であった。香水瓶は紙ラベルを貼ったものが主流であった時代に、ラリックは型押し技法を工夫し、美しく安価な香水瓶の量産に成功した。

本作は、ラリックが初めて注文を受けた香水瓶を、後に技法改良して制作したもの。「花々」を意味する名前の香水にふさわしく、みずみずしい花の香りが表現されている。美しい香水瓶は評判となり、後にラリックは多くの注文を得た。ラリックに転機をもたらした、記念碑的な作品の一つ。

4. 《鶴蒔絵香枕》江戸時代 18 世紀 高 12.4cm

日本に香りの文化が伝わったのは、仏教の伝来とともにであったといわれる。仏前の供養として、香りを焚き、香料を供えることが行われた。平安時代には、部屋に香りを満たす「空薫物(そらだきもの)」の習慣が貴族の間に定着する。『源氏物語』や和歌に見られるように、芳しい香りはその人の品性や魅力と結び付けられて語られた。

本作は、江戸時代の香枕。香枕とは、寝た状態で髪の毛に香を焚きしめるために用いるもので、近世になって登場した道具とされる。長方形の枕の中に抽斗(ひきだし)を持ち、ここに香を焚いた香炉を収めると、透かし穴から香りよい煙が立ち上る仕組み。全体に金の蒔絵を用いるが、外面は金粉をまばらに蒔いて梨の肌のように見せる梨地(なしじ)に仕上げ、鶴には図柄部分を立体的に盛り上げる薄肉高蒔絵(うすにくたかまきえ)の技法を用いるなど、さまざまに技巧を凝らしている。眺める角度によって異なる輝きを見せる金蒔絵は、薫髪の時間を特別に演出しただろう。透かし穴の形は源氏香の図を意識したものとなっている。



5. 高砂香料工業《昭和天皇御大典記念献上香水セット》1927年



1926年の大正天皇崩御ののち、昭和天皇即位の御大典が行われた。本作はその際に高砂香料工業が昭和天皇に献上した香水セットである。12種の香水がおさめられ、献上当時は附属する電熱製の銀製香炉を用いて香りを楽しむことができた。戦後に高砂香料工業が入手し、所蔵するものである。

香水の調香は、創業者である甲斐荘楠香自らが行き、12種の香水は1年12ヵ月それぞれにふさわしい香りを表現した。6月にはローズ、12月には「たちばな」などの花の香りが選ばれる一方、2月には「東風(こち)」、4月には「アムール(愛)」など文学的な主題も見えて興味深い。

当時の香水の調合は伝わらないが、今回展覧会に際し、高砂香料工業でこの香水の中身を分析し、特別に再現を行った。会場には香水2種を特別に実際に嗅いでいただけるコーナーを設置している。約100年前の献上香水は、現在では使われていない香料や大量の天然香料を用いたもので、どこか懐かしい上品な香りである。ぜひ会場に足をお運びいただき、この香りをお楽しみいただきたい。

【展覧会情報】

- 企画展： 香の器－高砂コレクション
会期： 2020年9月19日(土)～12月13日(日)
会場： 三重県立美術館企画展示室(1階)
〒514-0007 三重県津市大谷町11
TEL:059-227-2100
- 開館時間： 9:30～17:00(ただし、入館は16:30まで)
休館日： 毎週月曜日
観覧料： 一般900円、学生700円、高校生以下無料
※障害者手帳等をお持ちの方および付き添いの方1名は観覧無料。
※この料金で「特集展示 榊莫山展」、常設展示もご覧いただけます。
- 主催： 三重県立美術館 特別協力:高砂香料工業
企画協力： 岡村印刷工業、求龍堂、アートワン
助成： 公益財団法人三重県立美術館協力会

